

今年のコンペティション I 部門のファイナル選考に残り上演された作品は計 12 作品。どれも最終選考に残るべくして残った作品であり、見応えがあった。字数制限もあるのでここでは「ダンコレ」に立ち会えなかった多くの方の目にも触れることを念頭にひとつだけ記すことにする。各振付家/作家達による作品に関するテキストからも明瞭な“自己”つまり“私”という存在に対する強い関心がこれほどまでに多いのはなぜだろう？震災が起き、再び社会情勢が不安定さを増している今日、「ダンス」という表現におけるこのセルフ・アイデンティティへの問いかけは果たしてどれほどアクチュアルなもの足り得るのか？「ダンス」は、まずは意識や感情の発露であり、そして律動であってほしい。その律動が他者つまり社会と結びついてはじめて「ダンス」は見られ得るものとなるのではないか。

(前田圭蔵 (東京芸術劇場/realtokyo))

今年は韓国勢が圧倒した。確かに、例年の韓国の「情調に流れるテクニック」という印象を超えて、「自己批評的な切実な危機感」が、キム・ボラの『A long talk to oneself』からも、キム・ボラムの『Mistake』からも、在日フランス大使館賞のクォン・リョンウンの『The Skill for me』からも感じられた。ダンスを抑制して踊られた強度、それが彼らの身体の切実な危機感として露わになった。Masdanza 賞の三東瑠璃『ESQUISSE』、奨励賞の井上大輔『百年の身体』が日本勢では奮闘したのだが、むしろ今、日本こそ安易な表現＝自己実現への信頼から切断された切実な身体による実験や冒険が露わになるときのように思うが、それは巷に潜んでいるのであろうか。(室伏鴻)

ビデオ審査の段階から密度が濃く、赤レンガ倉庫で行われた本選では、日本、韓国、中国、イスラエルほか多様な文化や感性を背景にした作品や振付家のパワーがひしめく印象があった。悪天候の日もあったが、会場の熱気は全く衰えなかった。これこそが Competition I の醍醐味だろう。審査員賞のキム・ボラの迫力と完成度、在日フランス大使館賞のクォン・リョンウン作品の個性は、中でも特に印象的。受賞はしなかったが、木村玲奈の一目捉えどころのないような世界観にも惹かれる。ショーケース、受賞者公演などにも面白い作品、注目すべき人が多かったが、一定の評価を得た後の一步の難しさ、さらには作品を創り続ける難しさも透けて見えた。(新藤 弘子)

アジア圏のコンテンポラリーダンスのプラットフォームとしての色彩が強まった今回だが、韓国の作品は圧倒的だった。4 作品いずれも力作が並んだなかで、キム・ボラム『Mistake』に強く惹かれた。アルヴォ・ペルト「鏡の中の鏡」が響くなか、3 人の身体が生む「静かな暴力性」には総毛立った。クォン・リョンウン『The Skill for me』も、これまでの韓国勢とはまったく異なるスタイルが見られて興味深い。日本勢では三東瑠璃、井上大輔、寺仙彩、木村玲奈はそれぞれに可能性を感じさせたが、まだ発展の途上にある印象。既存のダンスの枠組みを壊したり、そこから逸脱していくような作品の登場を期待しつつ、次回は日本のコリオグラファーの発奮を待ちたい。(浜野 文雄)

言葉の発達以前から人間が行ってきた踊りは、身体表現の可能性を追求するとともにその起源を探究する芸術として拡張して、世界中でアーティストが出会い地球規模で加速するダンスの現在形を横浜で見ることができる。日本の学校教育現場でダンスが定着し始め、ローザンヌ国際バレエコンクールでは日本の新しい才能が注目を集めダンスを取り巻く環境が少しずつ変化する中で、新たな地平を切り拓くオリジナリティが今待望されている。10 カ国から 150 のアーティスト達の挑戦、そして 14 カ国から先進的なフェスティバルや劇場の 22 名のゲストを受け入れたダンスの拠点としての横浜ダンスコレクション EX、2014 年の受賞振付家の多くは特に振付・構成に卓越した力を見せ、個性的な手法で他者との対話を紡ぐ作品の力を示してくれた。コンペティション I は作品部門なので振付・構成は大きな評価軸ではあるが、そこからさらに超越していく何か、身体から立ち上る時空を見せるダンスの力を期待している。小野晋司 (青山劇場・青山円形劇場 プロデューサー)

横浜ダンスコレクション EX は、コンテンポラリーダンスの才能発掘という重要な役割を、今年も見事に果たしていました。

今年のコンペティション I には、日本、韓国、マレーシア、台湾、シンガポール、イスラエル、中国から 153 名もの振付家による応募がありました。これは横浜赤レンガ倉庫 1 号館のチームが何年にもわたり、粘り強く、横浜ダンスコレクション EX の発展とネットワーク構築のために取り組まれた成果が実を結んだ証しでしょう。

あいにくの悪天候ではありましたが、来場した観客や海外からの数多くのプログラマーは、3 階のホールで行われた公演はもちろん、ショーケースなどの上演にも立会い、アジアの若きダンスシーンにおける最も重要な場所のひとつとして、横浜赤レンガ倉庫 1 号館を再認識しました。

審査員賞は『A long talk to oneself』を発表したキム・ボラ氏が受賞しました。蜘蛛のようなダンサーの存在感が印象的な本作品は、幻想的な世界、エモーショナルで親密な映画の中へと観客を誘いました。また奨励賞は、《イコノクラスト》(因習打破主義者) キム・ボラム氏と、井上大輔氏が受賞しました。そして若手振付家のための在日フランス大使館賞は、クオン・リョンウン氏が受賞しました。クオン・リョンウン氏は、地元韓国ではすでに振付家として注目されていますが、このたび初めて外国で作品を発表しました。ありふれた小石を主役にした主題のシンプルさ、ユーモアを織りまぜたいたずらっぽい存在感、舞台上のミュージシャンとの共犯関係、綿密に構成された振付、それらすべてが、審査員や観客からの高い評価を得ました。

クオン・リョンウン氏にはフランスでの最長 6 ヶ月間のレジデンスの権利が授与されます。フランス各地の国立振付センターに滞在し、フランスのアートシーンを代表する振付家らと交流し、振付家たちの仕事の仕方やダンスの分野における製作システムの、異なるアプローチに触れ合う機会となるでしょう。今年の審査員のひとりである振付家エマニュエル・ユインが、クオン・リョンウン氏のレジデンスの受け入れとアシストを行います。またフランスでのレジデンス終了後は、日本で成果発表の場が設けられる予定です。

今年のプログラムでは、コンペティション I と II の過去の受賞者による公演も行われましたが、これらの賞を受賞したことが、アーティストたちのキャリアにおいて、どれほど重要な意味を持つかを示していました。受賞により、アーティストたちは日本や世界で作品を発表する機会を得て、実り豊かな芸術的出会いや、新しい試みを追求するための自信を得ました。(レベッカ・リー)

YOKOHAMA DANCE COLLECTION EX 2014